# 第１章　経験的性格の信仰か組織制度偏重のそれか（3）

（続き）

手段が目的になり、目的が手段になるとき、宗教は組織制度偏重に陥る。組織や制度は人々に仕える手立てとして案出され、そのように用いらるべく意図されたものだが、その組織制度の保持それ自体が目的になりかねないのである。そのとき、人の忠実度は〔本来の目的に即してではなく〕そうした組織制度にどれだけ仕えるかによって決定されるようになる。〔再び、マイスターの言である。〕

> 自身の組織構造を存続させ、その権威と神聖さを維持強化せんと、度を超して腐心するアメリカのプロテスタント教会。我々は今や、従来の教会がそんなになった時代を迎えるに至った。教会の組織形態というのは そもそも、教会が「適切かつ整った仕方で（decently and in order）」機能し、その贖いの使命を遂行しうるようにと、そのための手段として生まれたものだが、その保持そのものが仕えるべき目的となってしまったのだ。・・・人々に仕えるために組織を用いるのでなく、組織に仕えるために人々を用いる。・・・これは致命的である。自らの命を救おうとする教会は、それを失うからである。自分の命を救いたいと思う者がそれを失うように、(17) まさしくそのように 間違いなく。[18]

組織中心の目的を強調するこうした傾向は、なにがしかの集会があるとき 教会でなされるそのお知らせの仕方を見ても、そこにそれが現われているのが分かる。例えば、日曜学校の校長がこんなふうに言うのをよく耳にする。「地方連合の定期の日曜学校集会が今日の午後、レッドフォーク教会でもたれます。スミス兄弟が我が連合の新会長で、多くの出席者があるようにと、本当に一所懸命なさっています。みんなで出席して、兄弟の働きを支えるようにしましょう」。あるいは、こんなのも。「今日の午後、地方連合の訓練会集会がこの教会で開かれます。他教会のほうが我々よりも出席者が多かったりしたら、恥ずかしく思います。みんな、努めて出てまいりましょう」

組織を支える。ここに、強調点がある！ そして、集会に出席する。これが、忠実度を示す方法である！ 集会のしかるべき目的や、そこに出席する人々にその集会が何を得させてくれるのか、それらについてはほとんど説明がないか、全く語られない。もちろん、出席したら「何か 役に立つかもしれぬ（might be helped）」といった、漠然たる思いがないわけではない。しかし、自身の組織の出席者が少なくなったら、その人数を増加させるのが教会のリーダーたちの務めとなる。と同時に、主として こうした教会の諸集会にどれだけきちんと出席するかによって、教会員の忠実度と献身度が決定されることにもなる。〔そこでは もはや〕キリストのためにこの世界で何をなすか、あるいは何をなさぬかということは、関心の中心にはない。仕えられるべきは、組織なのだから！

宗教はまた、それを信じる者の生き方の質に増して その信条の正誤により大きな関心が向けられるとき、組織制度偏重に陥る。組織や制度というのは、当該集団がとりわけ重んじる価値観を広める

ために創設されるものである。そして、事の当初は、それらの価値観の求めるところに従って 集団の有りようが方向づけられ、実際、それらのもとで その活動がなされもする。しかしながら、それが後の世代に引き継がれるにつれ、強調点が次第に価値観の観念的認容に置かれるようになり、それに対し、価値観への密着度とその実践とが後退するのである。生き様より むしろ、信条のほうに重きが置かれるということである。

そして、信仰の「スピリット（spirit）」が失われ、ただ形だけになるとき、そのとき 宗教は組織制度偏重に陥ることになる。その一例を、礼拝に見ることができよう。礼拝の真実なスピリットというのは、典礼中心の極めて儀式的な式であれ、あるいは くだけた形式のそれであれ、そのいずれにおいても見られるものである。が同時に、そのどちらも組織制度偏重に陥る可能性がある。つまり、礼拝のスピリットが失われ、残るはその形式だけといったことが起こりうる。こうした原理原則は、礼拝以外にも、信仰生活の行為全般に当てはまる。すなわち、祈りや献金といった 信仰生活におけるその表現行為がそれで、それらは深い内的体験に根ざした外的表現たることもあれば、お決まりの形式的繰り返しにすぎないこともあるからである。

> 信仰が分化の傾性を示すのは珍しいことではない。そのようにして、その経験の中心から周辺的な部分へと、信仰が逸れてゆくようになる。・・・信仰の確信が教条化する。信仰の活動が形だけの、無意味で なす価値のないものに変質する。それらを手立てとして 多くのことを示し、数々の働きをなしてきた その信仰の組織や制度が、外側から頭上にのしかかり、信仰のスピリットに手をかけて そのいのちを奪うものとなる。そして、信仰はついには、その道徳的・精神的・霊的感性を失うのである。こうして、信仰の心魂が死に至る。それは神の名において事の進展を妨げる枷となり、真理の発見に抵抗して 預言者を石打ちにし、現状肯定の大擁護者として立ちはだかるようになる。そのようにして、組織偏重に陥り、教条化し、反社会的で非倫理的となったそれは 結局、神の御業の障害となり、その御子を十字架につけて、その御旨を無にするのである。だからこそ 神は、歴史の道筋において、組織制度偏重に陥って形骸化した信仰と 熱心に過ぎるその守護者らを繰り返し除き去らずにはおれないのだ。現実直視の預言者とスピリットの息づく信仰に その道を譲るために。[19]

〔ウィリアム・クレイトン・バウアー（William Clayton Bower）[(18)] も、このように言っている。〕

だとしたら、次のような疑問が呈せられるのもまた、もっともと言えよう。つまり、我々がもし本当に 新約聖書の信仰の本質からそれほど大きく外れてしまったとしたら、どうして それがもっと多くの人たちに明白にならないのか、という疑問である。実際問題、みんなはなぜ、そのことに気づかないのであろう？ この点に関しては、問いへの応答として、2つのことが指摘できる。第一に、この種の変化はごくゆっくりと知らずのうちに生じるため、それが起こっていることに 人は気づかないことである。望ましからざることが、いつの間にか入り込む。そして、それがそれなりのものとなり、ついには 普通のこととして受け入れられてしまうのである。そのようにして、信仰にいのちを

与える そのスピリットと活力が気づかぬうちに弱まり消え、外面的な形式だけが後に残ることになる。そして 二つ目は、仮に今日の情況がこれと同じとしても、こうしたことが人々の信仰生活に起きたのはこれが初めてではなく、しかも、皆の目にそれが明らかだったわけでもないということである。それどころか、宗教上の指導者たちですら、それに気づかなかったのである。

第二の点について言えば、例えば 紀元前8世紀の半ば、イスラエルの宗教的情勢は、その外的様相からすれば、どこから見ても 隆盛を極めていた。イスラエルの民は神に嘉されている、と 当然のように考えられていた。人々は犠牲の祭儀など、宗教的儀式に意を用い、それらを周到に守っていた。各地の聖所はどこも、参拝者で溢れていた。人々は繁栄の時代を生き、彼らはそれを、彼らに対する神の特別な顧みの確たるしるしと感じていた。そして、彼らはそれに応え、時の宗教の有りようを積極的に支えたのだった。ところが、イスラエルは破滅の淵を彷徨っていると宣告し、こうした人々を当惑させ、狼狽させたのが預言者のアモスだった。宗教的成功の外的しるしとされるものも また宗教上の外的表現とされるものも、それらはどれも、イスラエルをいのちの中心から蝕むその腐敗を覆い隠すまやかしの装いにすぎない、と告げたのである。そのように語って、独り善がりの自己満足のただ中にいた人々に、牧者出身の そのアモスが裁きの言葉を向けたのだった。正規の聖職者に敵意を起こさせたのも不思議はない（アモス 7：10〜17）。また一人「狂信的なの（fanatic）」が我々に厄介を引き起こそうとしている、と 人々はそう感じたにちがいない。[20] だが、振り返って歴史を見るとき、アモスはまさに 神の目に見えていたことを見ていたのだ、と理解できる。そして、信仰を奉ずる当時の人々は、その目が塞がり、それを見ることができなかったのである。すなわち、彼らの宗教は単に 外見が美しいだけの殻のようなものと化し、その内なるいのちもその内的活力も失われていたのだった。

## 根元的改革の必要性

以上の分析がそれなりに的確だとしたら、昨今のキリスト教が直面する情況はただ深刻というだけではない。危機的と言えよう。この情況を評して、ジェームズ・D. スマート（James D. Smart）[(19)] は次のように述べている。「情況を正しく見据えるとき、我々はまさに 教会としての存在の根本そのものを揺さぶられ、我々の間でキリスト教の信仰とされて通用しているものがはたして妥当なのか、その是非を問われるようになる」。[21] このように言うと、それはしょせん 単なる学問的な関心問題で、神学校の教授が一種の知的修練として追求するにすぎない、と思われる人たちもいるかもしれない。だが、そうではない！ 今日、キリスト教が直面する問題で、これ以上に深刻なものはないのだ。事は、キリスト者であるかぎり 例外なく、そのまさに中心において、信仰のいのちと務めとに関わるものとなる。なぜなら、我々は生ける神に仕えんとするが、しかし 我々が主に仕えるのは主として、教会での生活とその働きを通してだからである。その教会が もしも、何らかの理由でまた何らかの仕方で、主の道とは異なる他の道に従ったとしたら・・・。それにともない、我々のいのちと務めも必然的に、「的外れ（misses the mark）」なものとならざるをえまい。そして 我々

は、キリスト者としての存在の有りようの そのまさしく中心において思い違いを犯してしまうのである。

要するに、我々の教会は近年、その実態において明らかに 組織制度偏重の傾向にあるということなのだが、もしこうした見解が正しいとしたら、〔次に問われるのは、ならば・・・ということであろう。すなわち、〕ならば、自らのそのような有りようを積極的に変え、生き生きとした経験的性格の信仰を取り戻そうとする兆しが 何らかのかたちで当の教会に見て取れるか、ということである。これは、容易に答えられる問いではなかろう。たしかに、教会はそのようになすことも可能である。が その一方で、経験的性格の信仰に戻る道には多くの困難が伴うため、そうした代償を払うことを、教会はなかなか よしとはしないかもしれない。ではあるが、エルトン・トゥルーブラッド（Elton Trueblood）[20] は望みを抱きつつ、次のように記している。

> キリスト教は その歴史において、時代の変化とともに様々、大きな足どりを刻んできた。キリスト教信仰には、特筆すべき最大の特長の一つとして、自らをその内側から変革する力があるからである。外部からの教会批判にも事を促す勢いはあるものの、それがどれほど強くとも、内なる批判者には 自身が批判するその教会の働きを愛する愛があり、それは外なる者のそれよりはるかに力強く、また徹底もしている。それゆえ、改革は偶然でもなければ稀でもなく、本来的かつ内在的なのだ。組織の外的硬直は繰り返し生じる。だが、そこには 火山の如き爆発力が常に存在し、それを打ち破るのである。[22]

（続く）

## 注

1. *Yearbook of American Churches for 1961* (New York: National Council of the Churches of Christ in the U.S.A., 1960) 264, 279.
2. Gibson Winter, *The Suburban Captivity of the Churches* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1961) 30.
3. Martin E. Marty, *The New Shape of American Religion* (New York: Harper Bros., 1959) 15.
4. Claire Cox, *The New-Time Religion* (Englewood Cliffs NJ: Prentice-Hall, Inc., 1961) 1-2.
5. A. Roy Eckardt, *The Surge of Piety in America* (New York: Association Press, 1958) 43.
6. Will Herberg, *Protestant, Catholic, Jew* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1955) 89-90.
7. Ibid., 108.
8. William H. Whyte, Jr., *The Organization Man* (New York: Simon and Schuster, 1956) 254.
9. Ardis Whitman, "What Not to Tell a Child about God," *Reader's Digest* (February, 1962): 81-82.

10. Edmund Perry, *The Gospel in Dispute* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1958) 16.
11. Marty, 117.
12. Paul Hutchinson, *The New Ordeal of Christianity* (New York: Association Press, 1957) 113.
13. Herberg, 276.
14. Quoted in Eckardt, 158.
15. Winter, 100.
16. Hendrik Kraemer, *A Theology of the Laity* (London: Lutterworth Press, 1958) 127.
17. John W. Meister, "Requirements for Renewal," *Union Seminary Quarterly Review* XVI (March 1961): 254-55.
18. Ibid., 253-54.
19. William Clayton Bower, *The Curriculum of Religious Education* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925) 138-39.
20. James D. Smart, *The Rebirth of Ministry* (Philadelphia: The Westminster Press, 1960) 172.
21. Ibid., 162.
22. Elton Trueblood, *Your Other Vocation* (New York: Harper & Bros., 1952) 32-33.

## 訳 注

（1）アメリカのプロテスタント神学者。1916～2002 年。シカゴ大学神学院教授、プリンストン神学校教授等を歴任。教会と社会の問題を中心に論じた。

（2）〔　〕書きは、訳者の補筆挿入。

（3）アメリカのジャーナリスト。

（4）アメリカのプロテスタント神学者。1918～1997 年。米国宗教学会会長、リーハイ大学宗教学科科長等を歴任。特にユダヤ教とキリスト教の関係について、アメリカを代表する論者の一人となった。

（5）ユダヤ系アメリカ人の宗教社会学者。1901～1977 年。ドルー大学で教鞭を執った。

（6）使徒言行録に「（この）道」という表現で繰り返し出てくる「主の道」のこと。「わたしは道」（ヨハネ 14：6）と言われたイエス自身の言葉をも示唆。

（7）アメリカのプロテスタント・キリスト教史家。1928 年～。元・シカゴ大学神学院教授。とりわけ、近代アメリカキリスト教史の学者として著名。

（8）アメリカの社会学者、評論家。1917～1999 年。社会や組織と個人の関係について、特に文化的圧力の観点からこれを考察したことで知られる。

（9）選挙運動などで使われる丸いプレート。候補者の名前や写真、スローガン等が印刷されていて、支持者が胸などに付ける。"I/We like ...（私／私たちは・・・が好き）" "I/We love ...（私／私たちは・・・が大好き）" とは すなわち、「・・・支持」「・・・熱烈支持」の常套フレーズ。

（10）カナダ生まれのアメリカ人執筆者。1905～1990 年。社会問題、人間関係、教会、宗教等に

ついて数多く論じ、長年にわたって『リーダーズダイジェスト』の寄稿者も務めた。

（11）アメリカのプロテスタント神学者、宗教学者。1923～1998 年。ノースウェスタン大学の宗教学科創設に尽力。長年にわたり、学科長を務めた。キリスト教にとどまらず、仏教をはじめ 世界の主要宗教について研究し、論じた。

（12）アメリカの作家。1893～1960 年。ニューイングランドの生活を風刺した作品で知られる。1938 年、フィクション分野でピュリッツァー賞を受賞。

（13）前出（1）のギブソン・ウインター（Gibson Winter）。

（14）オランダのプロテスタント宣教学者。1888～1965 年。信徒の神学的・宣教論的位置づけを論じて著名。以下の引用文は、その代表的著作の一書 *A Theology of the Laity.*（邦訳『信徒の神学』）より。エキュメニカルな運動にも尽力した。

（15）*A Theology of the Laity.* は『信徒の神学』との書名で邦訳が出されているが（小林信雄訳、新教出版社、1960 年）、ここでは、エッジの引用原文から 私訳を行なった（邦訳書では、153～154 頁に訳出）。

（16）アメリカの合同長老教会牧師。1916～1974 年。合同長老教会神学教育協議会事務局長、同・キリスト教教育協議会委員、プリンストン神学校理事等を歴任。関連分野の専門誌に多数寄稿した。

（17）マタイによる福音書 16 章 25 節。

（18）20 世紀前半の米国キリスト教教育運動の主導者の一人。1878～1982 年。シカゴ大学神学院教授として、キリスト教教育の研究に科学的手法を採用。関連分野の執筆も活発に行ない、多年にわたって アメリカのキリスト教教育に影響を与えた。

（19）20 世紀アメリカを代表する聖書学者、キリスト教教育学者の一人。1906～1982 年。ニューヨークのユニオン神学校教授として 長年、神学教育に携わった。教会論に基づき、神学的アプローチによるキリスト教教育論を展開。主著の一つ *The Teaching Ministry of the Church.* は、『教会の教育的使命』との書名で邦訳が出されている（安村三郎訳、日本基督教団出版部、1958 年）。

（20）クエーカー出身として知られる、20 世紀アメリカの著名な神学者、哲学者。1900～1994 年。スタンフォード大学、アールハム大学他で教授を歴任し、多くの書を著わす。ハーバード大学、スタンフォード大学で、チャプレンも務めた。

（矢野 眞実訳）